

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：12608

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12958

研究課題名（和文）広く長い冷戦 プリントカルチャーが繋ぐ文化冷戦とアメリカ南部例外主義

研究課題名（英文）Wide and Long Cold War--Cultural Cold War, US Southern Exceptionalism, and Print Culture

研究代表者

山根 亮一（Yamane, Ryoichi）

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・准教授

研究者番号：90770032

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：「広く長い冷戦 プリントカルチャーが繋ぐ文化冷戦とアメリカ南部例外主義」というタイトルのもとで研究を進め、いくつかの成果を得ることができた。たとえば、ある論文では、冷戦戦士の代表格である歴史家アーサー・M・シュレジンジャー・Jr.の文学的着想が、いかに大統領への理想のために再解釈されていたかを照射した。また、他の論文では、野口米次郎とその息子であるイサム・ノグチに焦点をあて、日米それぞれの視点における国家観を恒久戦争と平和概念と共に表出させた。そして、南部作家フォークナーを日本人アメリカ文学研究者の視点を織り交ぜ、日米の反全体主義コンセンサスと、そこからの逸脱を試みる文学的着想を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義としては、これまでに語られることのなかった芸術家たちや学者たちの組み合わせから、アメリカ文化冷戦を批判的に、より新しい視点において語ることができたという点である。これまでいかにCIAやフォード財団等の組織がアメリカ文化を宣伝するために活動してきたかの議論はあったが、逆にそうした宣伝活動から文学的着想がいかに逸脱しようとしていたかを捉えるものはほとんどなかった。今回の研究は、歴史研究と文学批評を架橋し、それぞれに互恵的な視点から冷戦期アメリカ文学を学ぶ意義を再定義することを試みたものである。その社会的意義は、体系化されたアメリカ文学研究そのものの政治性を相対化した点にある。

研究成果の概要（英文）：Under the title "Wide and Long Cold War--Cultural Cold War, US Southern Exceptionalism, and Print Culture," I conducted research and obtained several findings. For instance, in one paper, I shed light on how the literary ideas of historian Arthur M. Schlesinger Jr., a prominent figure of the US cultural Cold War, worked for the idealization of the US presidency. Additionally, in other papers, I focused on Yonejiro Noguchi and his son Isamu Noguchi, revealing their respective national perspectives between Japan and the United States on perpetual war and peace. Moreover, by blending the viewpoint of a Japanese American literary scholar with that of the Southern writer William Faulkner, I elucidated the literary concepts striving to diverge from the prevailing anti-totalitarian consensus in both Japan and the United States, underscoring the entrenched status quo and endeavors to break away from it.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：文化冷戦 アメリカ南部例外主義 プリントカルチャー 日本におけるアメリカ文学研究 アメリカ小説・詩 恒久戦争 文化政治 核時代

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1)文化冷戦とアメリカ南部例外主義の議論は長らく別々に進行してきたが、研究開始当初から見て近年、これら二つが同時期にWilliam Faulknerの研究領域で新たな形で接近した。1949年のノーベル文学賞受賞者であるWilliam Faulknerは、ミシシッピ州の地域主義的作家であり、アメリカの自由と民主主義の宣伝者でもあった。2015年のAnnual Faulkner and Yoknapatawpha Conferenceでは、*Faulkner and Print Culture*というタイトルのもと、Faulknerの出版物をめぐるさまざまな文化的、政治的、歴史的事象について議論された。この中で、Lawrence H. Schwartzの*Creating Faulkner's Reputation: Politics Modern Literary Criticism*が頻繁に引用されたことにより、冷戦とFaulknerの関係が再注目された。

(2)アメリカ南部例外主義に対する議論は、今世紀に入り新南部研究(New Southern Studies)のLeigh Anne Duck、Jon Smith、Jennifer Rae Greesonらによって本格化した。Faulkner研究者のJay Watsonもこの流れに加わり、2016年のModern Language Associationでは南部研究者たちが地域主義的概念の障害を指摘。とりわけMichael P. Biblerは南部例外主義が南部、非南部の境界を交差する双方向的な差別主義によって構成されていると述べた。同年、Veronica Makowskyも南部研究の再興を訴え、Faulknerの小説の一節を引用して「南部」とは何かを問い直した。研究開始時には、Faulkner研究とアメリカ南部例外主義の問題は不可分となっていた。

(3)こうしてFaulknerをめぐる議論は、冷戦とアメリカ南部例外主義を、ほぼ同時期に問題化した。しかし、もう一步これらの問題に踏み込むには、冷戦という東西のイデオロギー上の分断とアメリカ南北の地域主義的分断を接続する視角が欠けている。これら二つの分断は別々の事象ではなく、重なり合い相互に補強しながら成立してきたからこそ強力なものであり、南部研究者だけでなく、アメリカ文学・文化に関わるすべての者にとって差し迫った問題である。しかし、そのような東西・南北横断的議論は焦点化されてこなかったか、単に欠落していた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、冷戦という東西の分断構造をアメリカ南北の分断構造に転写し、冷戦期アメリカ社会で分断のロジックがどのように強化されてきたかを明らかにすることである。この視点から、現在にまで至る根深いアメリカ分断社会の構造を解明する。

3. 研究の方法

冷戦とアメリカ南部例外主義の問題を合流させる議論はこれまで不十分であった。この欠落をおぎなうため、本研究の視点はプリントカルチャー論を基盤とする。雑誌の紙面上に印刷された様々な主体群を、地域性、ジェンダー、人種、思想などの属性を超えて文字通り接続することができるこの視点から、とくにCongress for Cultural Freedom関連の雑誌に掲載された作品と寄稿者たちの文化的・政治的ネットワークを分析し、冷戦と南部例外主義の重なりを検証する。

4. 研究成果

以下、主な成果を新しいものから示す。

[論文](計4件)

1. 山根 亮一、『ローズヴェルトの時代』と冷戦の修辞学 シュレシンジャー、エマソン、フォークナー、アメリカ文学と大統領、査読無、巽孝之 監修、大串尚代 他 編著、南雲堂、2023年、pp. 302-18

この研究は、歴史家でありCongress for Cultural Freedomの創設メンバーでもあったアーサー・M・シュレシンジャー・Jr.の『ローズヴェルトの時代』シリーズを通じて、彼がどのように文学的技法や着想を利用していたかを分析している。シュレシンジャーは、ラルフ・ウォルドー・エマソンやウィリアム・フォークナーの思想を引用し、FDRの政治的実行力や民主主義の理念を強調することで、アメリカのリベラリズムの理想を再構築した。一方で、彼の著作はニューディール政策の過程で犠牲にされた農民や労働者の苦悩を見落としており、フォークナーの地域主義的視点と対比することでその欠陥が浮き彫りになる。シュレシンジャーのリベラリズムとフォークナーの保守的主題との間には大きな隔りがあり、これを探ることで冷戦期の文化的対立と修辞学の新しい理解が提供される。

2. 山根 亮一、眠らせる警鐘 「鐘」とイサム・ノグチの恒久平和、ポー研究、査読無、日本ポー学会、第15号、2023年、pp. 52-68

1950 年の日本橋三越の作品展で、イサム・ノグチは釣鐘の絵と「かねがなる」という詩を展示した。この詩は、エドガー・アラン・ポーの「鐘」に影響を受け、米次郎の辞世の詩に基づいている。イサムの作品は核時代の平和主義を象徴し、戦争と平和の関係性を再認識させるものである。ポーの「鐘」は個人と共同体の自由と自己意識の闘争を描き、詠み手に深い内省を促す。米次郎の戦時中の詩集『宣戦布告』は戦争と平和の複雑な関係を示し、イサムの「かねがなる」は父の詩を平和主義的に再定義する試みである。

3. 山根 亮一、その広大な紙面にて ウィリアム・フォークナーと文化冷戦の言語アリーナ、ウィリアム・フォークナーの日本訪問 冷戦と文学のポリティクス、査読無、相田洋明 編著、松籟社、2022 年、pp. 97-118

1955 年にウィリアム・フォークナーを囲んで開催された長野セミナーでの寄せ書きに、関西学院大学の東山正芳は「 $E=mc^2$ 」と記した。このことは、冷戦期の国際政治と反核運動を象徴するものである。この関係式は、広島・長崎の原爆投下や第五福竜丸の被ばく事件を背景に、反核運動に参入した時期のアインシュタインを想起させ、アメリカ文化冷戦に対する批判的視点を提示し得る。長野セミナーは、日本人アメリカ文学研究者をアメリカ文化冷戦に巻き込み、その反全体主義の言論アリーナ内で統合される契機となった。そのなかで東山の記述は、アメリカ文化政治の広大な紙面における包摂力を相対化し、日本のアメリカ文学者に対して冷戦期以降のアメリカ文化との向き合い方を問いかける点で意義深い。

4. 山根 亮一、対立という繋がり ライオネル・トリリングと冷戦初期プリントカルチャー、アメリカ文学、査読有、日本アメリカ文学会東京支部、第 82 号、2021 年、pp. 11-17

1957 年、コロンビア大学教授ライオネル・トリリングはウィリアム・フォークナーへの手紙において、第二次世界大戦中までファシズムに傾倒し、そのことで精神病院に収容されていたエズラ・パウンドの解放を求めるフォークナーの主張を全く論理的でないと批判した。トリリングの文化観は、彼の 1950 年の著書『リベラル・イマジネーション』で示されているように、内面の複雑さと芸術の独立性を重視するもので、反権威主義的であった。冷戦期のアメリカでは、トリリングのような批評家为新批評と文化批評を通じて、政治と文化の対立を内面化しつつも、それを超える知的対話を試みていた。トリリングは『パーティザン・レビュー』などの雑誌の編集を通じて、様々な視点を取り入れ、反全体主義的立場を維持しながらも、複数の知識人が討論を通じて繋がる場を提供した。彼の仕事は、アメリカ文化の複雑さと多様性を示し、政治と文化の関係を再評価する視点を提供している。

[学会発表] (計 5 件)

1. Ryoichi Yamane, Translated Men: Dazai, Mishima, and Hagiwara in *Encounter and the Cold War Gender Politics*, SpaTrEM Final Conference, Translation in European Periodical Cultures, 1945-65, Johannes Gutenberg-Universität Mainz/Germersheim, 20 March 2024

この研究は、冷戦期の翻訳が日本文学における男性性の不安をどのように反映していたかを分析している。翻訳とは、言語と文化の相互作用を解きほぐし、再構築する行為であり、特に冷戦期においては、原作と翻訳者の間に存在するヒエラルキーやジェンダーの問題も複雑に絡み合っていた。Congress for Cultural Freedom の雑誌に掲載されたエドワード・G・サイデステッカー、ドナルド・キーン、そしてグレアム・ウィルソンの翻訳は、日本人男性作家の声を英語圏に紹介する一方で、当時の西洋社会における男性性の不安を反映する役割も果たしていた。サイデステッカーの太宰治、キーンの三島由紀夫、ウィルソンの萩原朔太郎の翻訳は、冷戦期の文化的背景とジェンダーの政治を考察する上で重要な事例である。これらの翻訳は、日本の男性性を再創造し、冷戦時代のアメリカ主導の文化政策の一環として機能していたことが明らかにされる。

2. 山根 亮一、ジェンダー・ヘゲモニーの隙間に 『映画狂時代』における間主観的な語りについて、日本アメリカ文学会東京支部 6 月例会シンポジウム、慶應義塾大学三田キャンパス、2023 年 6 月 24 日

南部作家ウォーカー・パーシーの『映画狂時代』は、冷戦初期における男性性とジェンダー・ヘゲモニーの隙間を探る試みとして位置づけられる。この小説では、ピンクス・ボーリングという語り手が、ヘゲモニック男性性を象徴する映画スターに対する崇拜や反発を描きながら、自己の男性性を模索している。物語の中で、ピンクスは映画俳優ウィリアム・ホールデンとの邂逅や、新婚夫婦の不安を観察するエピソードを通じて、社会的に期待される男性

性からの逸脱とその葛藤を示す。この語り手の間主観的な声は、自らの内面を他者との関係性で照らし出し、男性性をヘゲモニーではなく、関係性の中で形成される「何か」として捉える。パーシーの描く男性性は、ジェンダー・ヘゲモニーの外部に位置し、アイデンティティとして固定化されないものであり、その理解は男性性研究の新たな視点を提供するものである。

3. 山根 亮一、眠らせる警鐘 “The Bells”(1849)の韻律法とイサム・ノグチの核時代、日本ポー学会、オンライン開催、2022年9月17日

ヨネ・ノグチの辞世の詩「鐘が鳴る」は、エドガー・アラン・ポーの“The Bells”の影響を受けている。この詩が冷戦初期の核時代に生きる人類への警鐘としてイサム・ノグチの彫刻作品と共に再生されたことは、ポー研究においてほとんど議論されてこなかった。2020年の『PMLA』に掲載されたPeter Millerの論文“Prosody, Media, and the Poetry of Edgar Allan Poe”は、“The Bells”の韻律法を詳細に論じている。本論はその議論を基に、冷戦期以降のアメリカの恒久戦争状態に関する近年の議論に介入し、ノグチ父子の反戦的視点からこの詩の韻律法を再考することで、ポーの戦争観を明らかにし、アメリカの恒久戦争をより広い視野で捉え直す。

4. Ryoichi Yamane, Politics and Art of Reading: William Faulkner and Nuclear-age Readership in Japan, Faulkner, Japan, and the Cold War, Andrew Hook Centre for American Studies, 25 November 2021

1955年にウィリアム・フォークナーが参加した長野セミナーは、同年にアインシュタインが署名した反核宣言「ラッセル＝アインシュタイン宣言」と重なる歴史的な文脈にある。参加者たちの平和や核をめぐるメッセージは、戦後の日本における反核運動と軌を一にしている。とりわけ杉並区の主婦たちと安井郁が主導した反核運動は、このときまでに日本国内で広い支持を得ていた。こうした日本国内における反核、あるいは反アメリカ的運動は、フォークナー研究のなかではほとんど掘り下げられてこなかった。本発表はこの欠落を補うために、安井や主婦たちが杉並区で行った読書サークルの在り様を紐解く。

5. Ryoichi Yamane, The Three Mississippians in the Atomic Print Culture: Cold War Consensus and Regionalist Fantasies of the Nuclear Weapons, Faulkner and Yoknapatawpha Conference, The University of Mississippi (Online), 20 July 2021

ウィリアム・フォークナー、ユードラ・ウェルティ、リチャード・ライトというミシシッピ生まれの3人の作家たちは、それぞれ異なる形で冷戦と核問題に取り組んだ。1956年3月の『ライフ』誌に掲載されたフォークナーのエッセイは、共産主義や公民権に関する記事が印刷された頁の近くで、南部の人種統合に対する保守的な立場を示している。『ライフ』誌はこの立場を、核技術や人種統合についてのソ連の急速な進歩と対比されるかたちで提示した。ウェルティはフォークナーの見解を認識しながらも、核軍拡競争には直接言及せず、地域の自律性を支持した。ライトの小説『アウトサイダー』は、原子力のイメージを用いてアフリカ系アメリカ人主人公の存在論的な苦悩を描き、原子時代の広範な恐怖と複雑さを反映している。これらの作家の作品は、冷戦期における地域的および世界的な不安の交錯を明らかにし、核問題が彼らの文学表現に与えた広範な影響を浮き彫りにしている。

[教科書](計2件)

1. 山根 亮一、文化唯物論／新歴史主義、批評理論を学ぶ人のために、小倉考誠編、世界思想社、2023年、pp. 162-74

冷戦期に勃興した批評理論、文化唯物論と新歴史主義は、文学を歴史や政治と切り離さずに考えるが、視点が異なる。新歴史主義は登場人物や作家の内面に焦点を当て、文化唯物論は社会の変化や葛藤を分析する。前者はアメリカの批評界に馴染みやすく、後者はイギリスの階級闘争の文脈で受け入れられやすい。両者の実践例として、フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』があり、個人の内面と社会背景を交差させた分析が可能である。これらの手法は、変化や葛藤を含む視点を提供し、固定概念的な文化や歴史の提示を避けるために重要である。

2. 山根 亮一、フレデリック・ダグラス、深まりゆくアメリカ文学 源流と展開、竹内理矢・山本洋平編著、ミネルヴァ書房、2021年、pp. 70-71

2017年、アメリカ合衆国大統領に就任したばかりのドナルド・トランプは、フレデリック・

ダグラスについて「驚くべき仕事をしている」と述べ、まるで現在も生きている人物のように語った。これに対しメディアや学者はトランプの歴史的知識を痛烈に批判した。イエール大学のデイヴィッド・W・ブライ教授はトランプの無知を民主主義に対する脅威と非難し、2018年に出版されたブライの伝記『フレデリック・ダグラス』は2019年度のピューリッツァ賞を受賞した。この本では、ダグラスが1845年に出版した最初の自伝を中心に、彼の奴隷生活から逃亡し、卓越した奴隷制廃止論者として活動する姿が描かれている。ダグラスは後にも複数の自伝を執筆し、奴隷制廃止後の文化的・政治的活動についての学術的関心が高まっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山根 亮一	4. 巻 13
2. 論文標題 隣接の解釈学 フィッツジェラルド, ヘミングウェイ, そしてヒルビリー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 FLS言語文化論集Polyphonia	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根 亮一	4. 巻 82
2. 論文標題 対立という繋がり ライオネル・トリリングと冷戦初期プリントカルチャー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本アメリカ文学会東京支部会報 アメリカ文学	6. 最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根 亮一	4. 巻 15
2. 論文標題 眠らせる警鐘 「鐘」とイサム・ノグチの恒久平和	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ポー研究	6. 最初と最後の頁 52-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 山根 亮一	
2. 発表標題 「内面」の文化政治 Lionel Trilling と冷戦期プリントカルチャー	
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部9月例会	
4. 発表年 2020年	

1．発表者名 Ryoichi Yamane
2．発表標題 Politics and Art of Reading: William Faulkner and Nuclear-Age Readership in Japan
3．学会等名 Faulkner, Japan, and the Cold War (国際学会)
4．発表年 2021年

1．発表者名 Ryoichi Yamane
2．発表標題 The Three Mississippians in Atomic Print Culture: Cold War Consensus and Regionalist Fantasies of Nuclear Weapons
3．学会等名 Faulkner and Yoknapatawpha Conference (国際学会)
4．発表年 2021年

1．発表者名 山根 亮一
2．発表標題 眠らせる警鐘 "The Bells" (1849)の韻律法とイサム・ノグチの核時代
3．学会等名 日本ポー学会 (招待講演)
4．発表年 2022年

1．発表者名 山根 亮一
2．発表標題 ジェンダー・ヘゲモニーの隙間に 『映画狂時代』における間主観的な語りについて
3．学会等名 日本アメリカ文学会東京支部6月例会シンポジウム (招待講演)
4．発表年 2023年

1．発表者名 Ryoichi Yamane
2．発表標題 Translated Men: Dazai, Mishima, and Hagiwara in Encounter and the Cold War Gender Politics
3．学会等名 SpaTrEM Final Conference, Translation in European Periodical Cultures, 1945-65 (国際学会)
4．発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1．著者名 山根 亮一	4．発行年 2020年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 3
3．書名 「フォークナーからみる南部文学史事始め」「ポップカルチャーとしての乗り物」『よくわかるアメリカ文化史』	

1．著者名 山根亮一	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 2
3．書名 「フレデリック・ダグラス」『深まりゆくアメリカ文学 源流と展開』	

1．著者名 山根 亮一	4．発行年 2022年
2．出版社 松籟社	5．総ページ数 21
3．書名 「その広大な紙面にて ウィリアム・フォークナーと文化冷戦の言語アリーナ」『ウィリアム・フォークナーの日本訪問』	

1．著者名 山根 亮一	4．発行年 2023年
2．出版社 世界思想社	5．総ページ数 13
3．書名 「文化唯物論／新歴史主義」『批評理論を学ぶ人のために』	

1．著者名 山根 亮一	4．発行年 2023年
2．出版社 南雲堂	5．総ページ数 17
3．書名 「『ローズヴェルトの時代』と冷戦の修辞学 シュレシンジャー、エマソン、フォークナー」『アメリカ文学と大統領 文学史と文化史.』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織			
	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------